

なぜ戦争をしたのか

大津 隆文

毎年暑い夏が巡ってくると先の戦争のことが思い出される。

私の勤めた大蔵省では年一回、大臣と入省後三年までの若い職員との懇談会があった。ある年大臣宮澤喜一氏はこう語った。「皆さんに考えてもらいたいことがあります。それは日本はなぜ戦争をしたかです。私も考えてきたがどうもよく分からない」あれから数十年この問いかけが忘れられない。十二月八日の開戦に至るまでには曲折があり、平和的な解決を目指す外交努力も続けられていた。当時米国との戦争で勝算ありとの見方は少数で（海軍も本心は避戦論）、何よりも昭和天皇は和平を求められていた。しかし選択したのは結局戦争だった。

私の一応の答えは、政治が軍部を統制する「シビリアン・コントロール」を欠いていたためである。具体的には、

軍部は支那事変以降の侵攻を全面的に肯定し撤兵等の譲歩は断固拒否。

政治家には命を賭しても真の国益のための政策を遂行する気概の欠如。

マスコミ（軍部の検閲下にあった）、国民の強硬論・ナショナリズムの盛り上がり。

日本の組織の現状追認的風潮、上の決めたこと、他人の決めたことは黙認するとの

悪弊（戦後、実は自分は戦争に反対だったと称する人多数）。

対日石油禁輸、妥協の余地のないハル・ノートで日本を追い込んだ米国の戦略。

加えて政治的に軍部が大きな発言権を持った歴史的、制度的背景として、

日清、日露戦争勝利への称賛、満州事変以降の大陸侵攻も国民は支持。

政党政治は党利党略に流れて国民の信頼を失い、軍部の方が清新との見方。

二・二六以降政治家に対して高まった軍部の無言の圧力。

首相の権限の弱い内閣制度（軍部大臣現役制）。

他方、軍部は統帥権の独立という憲法解釈により政治による統制を拒絶。

私の考えが当たっている自信は全くないが、大切なのはあの「愚かな」戦争をなぜしたのか考え続けていくことではなからうか。それが無残に命を奪われ、塗炭の苦しみを味わった方々へのせめてもの慰霊、償いといえよう。